

2011 年度前期学校ボランティア活動レポート集

目 次

土屋小学校・前期

1. 生きる「基礎」を学ぶ	鈴木 寛太154
2. 指導すること	岩尾 拓哉154
3. 行事と児童の成長	武田賀奈恵155
4. 「与える」のではなく「引き出す」授業	阪本 崇156
5. 明朗快活な子ども達	川合 智也157
6. 先生としての子どもへの接し方について	中舛絵里奈158
7. 子どもの遊び方	栗原 史帆159
8. 子どもと教師が作る空間	堤 有起子160
9. 素直な気持ち	馬場 智香161
10. 学校ボランティア	水野 航161
11. “学校”を支えること	埼玉 瑞帆162

土屋小学校・前期

1. 生きる「基礎」を学ぶ

国際経営学科 2年 鈴木 寛太

まず、このような素晴らしい経験が出来たことに土屋小学校関係者、そよ子先生には本当に感謝しています。子どもたちに教えるという立場から先生の気持ちや、最近の子どもたちの考えを知ることが出来ました。また、この貴重な経験から私自身成長できたと感じます。この濃密な数カ月間は私の心の財産です。

5月から7月の約2ヶ月間、毎週水曜日に土屋小学校へボランティアとして活動しました。小学校へ行ったことで、先生方の努力を垣間見ることが出来ました。先生方は生きることの「基礎」を子どもたちに一生懸命に教えていました。それは、挨拶であったり、給食でのマナーであったり、字を丁寧に書くことの大切さ、掃除の大切さなどです。先生方は子どもたちに分かりやすく教えていたことが印象的でした。私が小学生の頃、このようなことが行われていたと考えると、当時の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。先生方の行動一つひとつに意味があり、それが今の私たちを創り上げたのではないかと考えます。また、それが代々受け継がれていくことで、子どもたちは大人になっていくのだと感じました。

ボランティア初日、子どもたちは皆、人懐っこく、休み時間になると私は引っ張りだこになり、その時だけヒーローになれたことは何より嬉しかったです。2年生の子どもたちは皆元気がよく、遊ぶエネルギーが尽きない感じでした。その2年生の授業で、算数の二桁の掛け算の答えあわせをやらせていただきました。子どもたちは「大学生のお兄ちゃん」と言いながら私に丸つけを求めてきました。最初はその丸つけに何も抵抗はなかったのですが、人数が増えるに

つれて丸つけの量も増え、間違っただけ丸をつけてしまった子どももいました。私はその子にもう一度間違えた問題を説明して再度丸つけを行いました。そこで感じたことは、単純な丸つけという作業でも、子どもたちはこの掛け算を生まれて初めて行うものだという。すぐに理解して覚える子もいれば、問題を間違えてくる子もいる。そこで私が間違っただけ丸つけをしてしまったら、子どもたちは間違えたまま覚えてしまう。丸つけ一つの作業でも子どもたちにとっては、大切なことだと肌で感じました。

また、考えさせられたことがもう1つあります。ボランティア最終日、6年生の男の子に「今日で学校来るの最後なんだ。」という男の子は、「え、ウソ、ウソ、ウソ、ウソでしょ?」と言ってきて、私の名札を取り、「またあう日まで」と書いてくれた。もう会えないかもしれないと分かりながらその言葉をかみ締めると私は涙をこらえるのに必死でした。

あの、明るい笑顔に囲まれて共に学べた2ヶ月間は、これからの大学生活や将来にきっと役立つのだと思います。子どもたちの一生懸命に何事にも打ち込む姿勢や、キラキラと好奇心に満ち溢れている瞳、その全てを創り上げている人は先生方であり、また子どもたち自身なのだと感じました。生きることの「基礎」を学ぶ小学校の大切さをこの歳で理解できました。心あたったかい土屋小学校の子どもたちから、人が成長していくには何が必要なのかを教わった気がします。

2. 指導するということ

国際経営学科 2年 岩尾 拓哉

私は今回「学校ボランティア演習Ⅰ」という授業で貴重な体験をさせてもらった。土屋小学校で5月の11日から約2ヶ月間活動し、子どもたちと触れ合う機会が出来て本当に良かった。

た。初めは子どもたちと上手く交流出来るか不安で、あまり積極的ではなかったけど、今となってはいろいろと得るものがあり、学校ボランティアをやって良かったなと思っている。

私がこの学校ボランティアを通して気付いたことは、先生の傍でお手伝いをすることで、初めて先生の立場から子どもたちを見て、子どもたちの成長を妨げずに育むことの難しさを知ったと思う。もちろん先生になれたわけではないので難しさの本質は見えていないだろうが、少し垣間見ることができたのではないかなと思う。それは、授業時に先生を見ていて、問いかけをして子どもたちに考えさせるようにしていたり、時間が許す限りわかるまで同じことを教えていたりしていたのを見て感じた。先生は子どもたち全体、クラス全員を意識していた。

私はそのような先生の姿を見て、なるべく子どもたちみんなに話しかけてさびしい思いをする子がいなくなるように心掛けて行動した。しかし、子どもたちの中には積極的に話しかけてくる子もいて、無視はできないので、容易ではなかった。そのためにもいろんな子に目配りをし、内気な子や問題を抱えている子をケアしながらも積極的に話しかけてくる子どもたち、みんなに気持ちが届くような関わり方を見出すように努めてみた。そうすることによって学級があたたかみのあるもの、安心感のあるものになっていくのではないかなと思った。

その結果、子どもたちに名前を覚えてもらえたり、給食時間も会話が弾んだり、ドッジボールをやろうと誘われたり、少し親しまれやすくなったのかなと思った。体育の時間に自分とチームを組みたいと言われた時はとても嬉しかった。運動会の準備では子どもたちが小道具として使うものを製作し、運動会当日に使っていたのを見て、すごく嬉しい気持ちになった。子どもたちは運動会に熱中してて、あまり絡む機会がなかったので寂しくはあったが、微笑ましく子どもたちの頑張っている姿を見守るのも大切だと思った。

プールの横で木を切った日は汗の量が半端なくて、その日は心の底から「校務さんいつもお疲れ様です」と思った。あと、純粋に体力が欲しいと思いつつも、子どもたちが元気にプールではしゃいでいるの聞いて元気をもらいながら校務さんと仕事をした。疲れることもあったが面白いし自分の仕事に対していろんなことを思っていることを聞いたりして為になったのかなと思う。

最終日では、給食を大量に盛られてすごく困ったが、子どもたちが見ているので威厳を保つためにも頑張ったり、名札にちょっと落書きしてもらったりして最後は印象深く終えることが出来て良かった。また、機会があればやりたいなと思った。

3. 行事と児童の成長

国際経営学科 2年 武田賀奈恵

学校ボランティアに参加し、主に低学年の授業サポート、校務作業を行ってきた。今まで教わる立場として学校にいたが、教える立場として学校をみて、「教える」とは何なのかを考えることが出来た。このボランティアでは、先生方が児童を的確に導いている姿に驚き、児童の学習に対するひたむきさに感心しながら、多くのことを学ぶことが出来たと感じている。

このボランティアを通じてとても印象に残ったことがある。それは、「運動会」だ。大きな行事を通して児童が成長していく姿をみて行事の持つ力を強く感じた。また、土屋小学校は少人数の学校で、ひとつの行事を成功させるために、児童はもちろん、教員、父兄、地域住民みんなで協力していた。当日の父兄の活躍は素晴らしいもので、教員なのではないかなと思うほどであった。

運動会が行われたのは、6月4日で、その前の週まで児童は競技やダンスの練習をひたむ

きに頑張っていた。3・4年の合同体育のクラスに授業サポートに行った時、4つのチームを作って、各自走る順番を決め、リレーの練習をする授業をした。しかし、あるチームは一向に走る順番が決まらない。そのチームには、「リーダーシップをとれるような子がいなかった」という原因の他に、児童一人ひとりが全く協力しようとしていないという原因があった。チームというまとまりの中に自分がいるという認識が薄かったように思う。しかし、先生の「協力しようとしてない人がいるから決まらないんじゃないですか〜?」という一言や、「みんなで決めなきゃ意味がないと思います!」という言葉で、児童の行動が変化した。その日は、一回リレーが終わるごとに、走る順番を変えていたが、回数を重ねるにつれて、順番を決める速度が変わっていった。行事に対し、個人の目標に向かって頑張るのはもちろんだがクラスの子と協力することの大切さは、この時に学ぶのではないか思った。

運動会当日は、すべての児童が仲間と共に、ひたむきな練習の成果を発揮していた。児童は、目標を持ち前に進むことで、知らないうちに大きく成長しているのだと思う。また、児童が成長するためには、父兄の協力、教員の誘導…行事を通してどれだけの人が関わっているのか、児童たちを取り巻く「大人の輪」をすごく実感した。

運動会の次の週、ボランティアに行くと教室の中には、運動会で真っ黒に日焼けした土屋小の児童たち。全員が運動会を通じて、ひとまわり大きくなっているように感じた。

4. 「与える」のではなく「引き出す」授業

国際経営学科 2年 阪本 崇

今回土屋小学校に行き、校務作業やプールの授業のサポート、体力テストのサポートや1・

2年生の授業のサポートをさせていただいた。このほかにも児童と昼休みの時間遊ぶなどして、今回のボランティアを通し貴重な経験をさせていただいた。

そんななかで私が一番参考になったなと思ったのは1・2年生の授業だ。私は塾の講師をやっていて、授業を行うことに関してはある程度自信を持っていたが、土屋小学校のボランティアで授業のサポートを行うボランティアがあったとき、授業というのは奥が深く、自分が目指す頂はまだ高いと思い知らされた。特に参考になったのは1年生の生活科の授業だ。

その授業は1年生の児童たちが植物の種を植えたのを観察し、その報告をするという授業だった。先生が「昨日と違って何か変わった点がありましたか?」と聞き児童たちに発表をさせる。そしてある児童が「葉っぱが二つ出てきました。」と答えた。先生は「そうですか。ありがとうございます。座ってください。」と応え、授業を受けている児童たちに「この次はどうなると思いますか?」と質問した。

この授業を見ていて、私はただ知識を教えればいいというのが教育ではない。知識を通していろいろな力を手に入れるのが教育なのだ、と思い知らされた。この授業で得られている能力はたくさん見い出せる。まずは児童に質問し手を上げさせることで積極性が得られ、それを発言という形で発表させるため、文章作成能力と話す能力を得ることができる。これは聞いている子たちにも力がつく。人の話を理解し、聞く力だ。

これ以外にも、先生がどうなるかという質問で想像力を養うことができるなど、6つの力が身についている。知識をただ教えているだけではおそらくこの6つの能力はおそらく身につかないだろう。このように少し工夫する事でこんなにもたくさん能力がつくのだなというのを改めて知り、教育というのがいかに難しいか考えさせられた。

私が土屋小学校のボランティアで得た経験は

これだけではない。上記で明記したことに似ているが、学校という場所は授業だけではなく、これからの学年が上がるためにも集団行動というのをしっかり教えなければならないのだと強く思った。そう考えた理由は2年生の授業の時だ。2年生のクラスはあまり落ち着きがなく、加えて1年生以上の元気さを持っている。だから授業の大半は普通の授業も行うが、その他の部分は集団行動を教える時間にあてられている。多い時では、半分半分で行われている。そこでこの集団行動の教えは授業の一瞬だけでは終わらない。これからの先の人生でも使えることなのだ。例えば、ある2年生の児童が授業についていけないでいた。また、黒板に書いてあることも全く書いていなかった。そんな児童に先生が言ったことは「わからなかったら、どうすればいいんだ？悪いけどお前一人のために授業は中断できないんだ。じゃあどうすればいい？友達とかに聞くしかないだろ。」この言葉は小学校だけではなく社会に出たときにも必要なことだ。このように授業だけではなく、集団行動のあり方も教えなければならないのだと思った。

今回私は土屋小学校のボランティアに行き、たくさんの経験を得ることができた。そのどれもが私が、教員になっていくうえで必要なことであった。そして自分が目指す頂はまだまだ遠いなと思った。

5. 明朗快活な子ども達

化学科 2年 川合 智也

学校ボランティアに参加させて頂いた経緯には、一つ、私の大きな勘違いがあった。教職課程を履修する上で、「教科または教職に関わる科目」に位置付けられる、この「学校ボランティア演習Ⅰ」という科目は、選択必修科目として確実に履修しなければならないものと思い込ん

でいたのだ。もし、必ずしも必要としない科目であるという事実には私自身が気付いていたら、人付き合いが苦手な私が、この科目を履修することはおそらくなかったであろう。しかし、幸か不幸か、このボランティア活動を終えて、私の心の中は、子ども達への多大な感謝とやって良かったという達成感に満ち溢れている。この経験は、自分自身にとって大きな利益へ繋がったと、胸を張って言える。

ボランティア初日は、不安で夜、眠ることができなかった。子ども達ときちんとコミュニケーションができるであろうか。無視されたり、いじわるをされたりしないだろうか。根が人見知りであった私は、そのような心配ごとで頭が埋め尽くされていた。不安と緊張で胸が張り裂けそうになりながらも、「開放中」と書かれた通用門を開き、土屋小学校へと足を踏み入れたのだった。

土屋小学校は、大変アットホームな雰囲気の小学校だった。1学年1クラス、全校児童約100名というこの学校は、私が卒業した全校児童数、約1000名の小学校では考えられない程の小規模な学校である。そのためか、子ども達は自身のクラスだけに留まらず、他学年の子達とも、お昼休みに遊ぶなどして仲良くしており、学年の垣根を越えて児童間の交流を深めているという印象を受けた。子ども達は、ボランティア初日から私に興味を抱いてくれて、こちら側から話しかけるといった働きかけをするまでもなく、絶えず話が弾んだ。私が始めに抱いた不安は、取るに足りないものだとすぐに思い知らされた。お昼休みは、子ども達にサッカーをしよう、バツを捕まえにいこう、ポケモンのしりとりをしようと誘われて、私自身が大変充実した時間を過ごすことができた。

さらに、ボランティアの回数を重ねるうちに、当日の担当ではないクラスの子達にも話しかけて貰えるようになった。大学生のお兄さんとして、子ども達の友達として、そして、1人の人間として、自分が認知されたようで、顔を

覚えて貰ったことをとても嬉しく感じた。それと同時に自分の心が温かくなっていくような気がした。また、子どもたちだけでなく、教職員の方々も仲が良いという印象を受けた。給食の時間には、一つのテーブルを囲み、歓談されていた。理科の先生の方に「子どもたちとの触れあい方がうまい」と褒められて、自分への自信に繋がった。

自分が教師に向いているかどうかは、まだ分からない。しかし、今回の活動で私は、人との触れ合いを通して心が豊かになっていくことを子ども達に教わった。子ども達から心の温かさを受け取った。勉強を教えるだけが教師の役目ではない。当たり前なことではあるが、再認識した。もし、私が教師になることができたのであれば、子ども達から貰ったこの心の温かさを今度は、私が子ども達に与えることができたなら良いと思う。

6. 先生としての子どもへの接し方について

生物科学科 2年 中舩絵里奈

私は子どもが好きで、ボランティア活動やその他の活動でも色々な年齢の子ども達と接してきました。だから今回の「初等教育演習Ⅰ」という授業も友達に誘われて軽い気持ちで受けました。子ども達と接するのには慣れているから、きっとこの演習で悩む事はないだろう。そう思っていました。でもいつもボランティアでただの「優しくて楽しいお姉さん」として接するのと、今回の演習で「先生の見習い」として子ども達と接するのとは全く違うもので、実際の先生と子どものやりとりを見て考えさせられた事が多くありました。

第1に、子ども達への話し方。私は普段言葉遣いが悪く、「うるせえ」とか「黙れ」とか言ってしまう。ボランティア活動で子ども達と接する時も、軽い気持ちで乱暴な言葉遣いをし

ていました。でも今回の実習では、「神奈川大学の学生」としてしっかりした言葉遣いで話さなければならない、とも感じていたし、何より学校という子ども達へ色々なことを教えなければいけない場所で、ちゃんとした大人としてお手本にならなくては行けませんでした。どの先生も叱る時にちょっときつい口調になりましたけど、子ども達に対して普段私が使っている様なひどい言葉遣いをすることはありませんでした。やはりそれは、先生が乱暴な言葉遣いをしてしまったては、子どもが他の人に嫌なことを言った時に叱ることができないからだろうなと思います。そして先生の心無い言葉によって子どもが傷ついてしまう様なことが学校内であつたらきっと大きな問題になってしまうので、どの先生も細心の注意を払っているのだらうな、と思います。

第2に、子ども達がいけないことをしたときにどのように叱ればよいのかということ。普段のボランティア活動では、子どもが何かしたときはすぐに施設の先生やその場にいる親が叱ってくれたので私には叱る責任というものがありませんでした。今回のボランティアでも、担任の先生がしっかり叱ってくれたのですが、それだといつも自分がやっていることと同じだからそれじゃあいけないだろう、と思いました。どうやって叱れば子ども達が言うことを聞いてくれるのか。どうやっていけないことを教えればいいのか。約2ヶ月間、色々な先生の叱り方を見てお手本にしようとしていました。その中でもなるほど、と思ったのは4年生の先生の叱り方でした。授業が始まる前に、「大事な話がある。」と言って子ども達が静かになるのを待つ。最初は、子ども達も隣の人とおしゃべりしたりしてざわついていたのですが、先生がずっと黙って子ども達を見つめているうちに、子ども達は「大事な話なんだ」ということがわかり、次第におとなしくなり、最後には教室がシーンとなりました。そして、シーンとしたその後でようやく先生は口を開いて子ども達に話し始めま

した。そこでの話は、10マス計算でずるをしている人がある、という話だったのですが、それはいけないことだと子ども達は皆理解したようでした。まず、叱るためには子ども達へ、どれだけ自分が真剣であるかをわかってもらうことが大切なんだな、と思いました。いつもヘラヘラ笑って「駄目だよ～」と言うだけじゃ伝えるべきことを何も子ども達に伝えられない。それに気づいた私は、いつも笑顔でいることも大切だけど、大切なときには子ども達の目を見つめ、真剣な顔で話さなければいけないのだなと思いました。

第3に、学校で接する子どもは決して一人だけではないということ。普段の私は自分に話しかけてくれる子どもだけと仲良くしていたけれど、学校の先生はそれは絶対にしてはいけないことで、子ども達全員に目を向けることが大切なのだなと思いました。皆に平等に気を配り、子ども達全員の成長の手助けをするという大切な役割を先生は担っているのだな、と思いました。

色々なことを学べて本当に充実したボランティアになりました。ここで学んだ事は忘れないようにしたいです。

7. 子どもの遊び方

総合理学プログラム 2年 栗原 史帆

子どもたちと一緒に話しているとわたしたちも知っているような昔からある遊びをしていることが分かりました。しかし、その遊びにはそれぞれ独自のルールが作られており、またそれを作っていくことにより友達との間で意見を交換して、その問題点を解決したりというわたしたちの年齢でも難しいことを子どもたちは自分たちにあった議題で自然と行っていました。これにはしっかりとした理由がありました。このことにより子どもが一緒に遊ぶということが大切

な学びであることを知りました。今回そう分かったのは5月から7月にかけて週に1回2時間ほど小学校に行かせてもらい、その中でも給食や休み時間を一緒に過ごし、小学生の間の会話や、わたしに向けて遊び方を教えてくれるときの小学生たちのその言動により気づきました。

今回特にそう感じた遊びは1年生のしていた“じゃんけん”でした。まず私たちは遊びとしてじゃんけんをすることは少ないです。するときは順番決めなどがほとんどで、そのじゃんけんのルールを自分たちのものに作り変えようなどとは考えません。じゃんけんは基本のグー、チョキ、パーの3種類でそれぞれ石、はさみ、紙を手によるジェスチャーで表現し、それにより勝敗を決めます。最初はただこれらのすべてに勝つことのできる種類を考えていただけかもしれませんが、またそれを含めたすべてに勝てる技を……と古い技が新しい技に劣っている点、勝っている点をしっかり理由付けをしていくのです。例えば、パーの状態から指先（第一関節あたり）を曲げた“ヒッカク”という技を教えてくださいました。最初これは全部に勝利するということでしたが、最終的に石、紙には勝つことができるが刃物であるチョキには負けてしまうというものである。私はこの結論にすぐ納得がしました。どんどん聞いているうちに“人食い花”“お化け”“破壊光線”“津波”“魚”などのそれぞれに勝つことのできる技が次々に出てきました。しかしほぼオリジナル同士の勝敗を決めていくという技の構築傾向になっていく中、ある子どもは「人食い花ははさみには切られてしまう」と言いました。私はこれを聞くまではアニメやゲームの技の名前から作り上げていると若干思っていました。この言葉をきいて、この一つひとつの技をしっかりと想像して考えているのだと気づきました。この話を聞いたほかの子どもは「そうか」と頷いてまたルールを作り変えていきました。また、この話を聞いた1週間後に行き、そのじゃんけんを

行くとルールが変わっていました。聞いてみると本人たちも変更されたんだと言っており、考えたら先週の勝敗のつけ方が違っていたと思っただけ。そして本当に順番決めを行うときには本家である3種類しか使ってはいけないというルールに戻ると教えてくれた。

これから考えると結果的に元のルールに戻るという結果でも途中経過にあるオリジナルを考える、意見を言う、聞くが問題の解決法、考え方の訓練になっていると分かった。このことにより見守る側にある私たちはその経過を見逃さず、間違った結果になってしまった場合にはその途中経過から原因を理解し接していきたいと思うようになった。

8. 子どもと教師が作る空間

総合理学プログラム 2年 堤 有起子

私は今回、自分が教職志望ということで土屋小学校のボランティアに参加させてもらった。自分が思っていた以上にたくさんの発見があり、たくさんのことを学ばせていただいた。その中でも特に印象に残ったのが「子どもと教師が作る教室空間」であった。私がかつて通っていた小学校は各学年4クラスずつという比較的大きな学校であった。それぞれの教室は全く同じ作りで、児童数が多いとはいえ近所の子が多いので他のクラスにも友達は多かった。にもかかわらず、他のクラスの教室に足を踏み入れるということは、一人で異国の地に降り立つような感覚に似ていた。それくらい教室の雰囲気というものは子どもと教師で大きく変わるのだと思う。

校務さんのお手伝いでは、私が小学生の時挨拶しかしていなかった校務さんがこんなにも重労働な仕事内容を一人でこなしていたのだと知った。炎天下での草刈りや校内の整備などはただただ単純な作業で一人では本当に大きな負

担なのだろうと思った。そのため一緒に仕事をこなせる様な教員が必要だと感じた。

運動会のボランティアでは自分が運営のボランティア側につくことで、地域の方々、保護者の方々のボランティアがどれほど大きなものか知ることができた。やはり運動会を開催するということは簡単なことではなくて、子どもの安全面はもちろん、お金のことやスムーズな進行のためにはたくさんの人の力が必要なのである。だからこそ自分が教員になって行事運営をこなすようになった時、自分のことに精一杯にならず、支えてくれる様々な方への感謝を忘れないようにしたい。

そして一番自分にとって勉強になったのは授業のお手伝いである。私は塾の講師をやっているが、やはり学校という生の授業はまた少し違った。学校とは一方的に勉強だけを教えるところではない。子どもは一人ひとり個性が全く違い、ひとつの問いかけに対し10人いれば10の意見が返ってくる。しかも低学年になればなるほど間違いなどを恐れずに発言してくるので突飛な意見も多数出てくる。私が感心したのはそれらに対する先生の受け答えだ。時には道を外れてしまいそうな意見も出てくるだろう。しかしそんな意見も決して否定するだけではない。また周りの子どもにそれについて意見を求めるのだ。そしてうまくいいところを吸収し、かつしっかりと本題の道筋を修正する。そうやって誰もが自由に、そして周りに気を遣って発言できる空間が出来る。そのような空間を作るには教師の存在が不可欠となるが、次第にそれが子どもたち同士で出来るようになる。友達が間違ったことをすれば友達同士で注意できる。その言い方がきつかった場合は「それは少し言いすぎだよ」と言えるようになる。友達のいいところを「それいいね!」と素直に言えるようになる。ごく当たり前のことだが、子どもがそのように育つ過程には、保護者はもちろんだが教師も想像以上に関わっているんだなと実感した。教師や子どもが違えば教室に流れる温

度や匂い、雰囲気など様々なものが違ってくる。そしてそれらにそのクラスの「個性」が染み込む。私はそのような「教室」という空間を大事にしていきたい。

9. 素直な気持ち

総合理化学プログラム 2年 馬場 智香

今回、私は5月10日から7月12日までの約週1回（全8回）学校ボランティアとして土屋小学校に行ってきました。活動内容は、毎回違うクラスでの授業補助、校務さんの仕事の補助、小学生と給食、お昼休みに小学生と遊ぶ、などでした。今回のボランティアを通してたくさんのことを学ぶことができました。授業を担当する先生について、また、その裏で頑張っている校務さんについても学ぶことができて、とても貴重な体験だったと思います。私たちは教育実習に行くことになりましたが、学校ボランティアでは教育実習で体験できないであろうことも出来て、一生忘れることのない経験となりました。そんな経験の中で印象的だったことは小学生の「素直な気持ち」です。

1年生のクラスでは児童が手を挙げて質問の答えを発表し、その答えについて先生が「この答えでいいですか？」他の児童が「いいです。」と言っていました。間違っていると思ったときには「違う」と言っていました。小学生は本当に素直で、その素直な気持ちがしっかりと育つような授業内容だと思いました。1年生なので気持ちのほうから先に出来てしまい、手を挙げる前に意見を言い始めてしまったり、言い合いのようになってしまう場面もありました。しかし、「素直な気持ち」を持っているからこそ、余計なことを考えずに意見を言うことができるのだと私は思いました。自分の思っていることを素直に言えること、自分の感情を表に出せることは本当に素晴らしいことだと思います。

次に5年生では理科の授業でかぼちの苗を植えました。小学生と一緒に草をとり、土を耕して、2人1組でかぼちの苗を植えました。かぼちの苗を植えていると、1人の児童の発言がきっかけでけんかが起こりました。小学生なのでごく小さなことが原因で、何故か大きなことに発展してしまい、1人の児童が「死ね」と発言してしまったのです。その発言について、それぞれが自分の意見を言い合い、泣きそうになりながらも「死ねという言葉はいけない」と訴える女の子もいました。「死ね」という言葉について、個々でいろんなことを感じたのだと思います。最近は意味もなく「死ね」などの言葉を使ったり、口癖になっている児童もいる中で、土屋小学校の児童が本当に素直に物事を感じることができているので関心しました。結果として仲直りできたかはわかりませんでしたが、「死ね」という発言をしてしまった子も反省をしているようでした。その児童は軽い気持ちでそのような発言をしてしまったのかもしれませんが、その発言について他の児童の反応が予想以上に大きかったために、言葉の重さに気づくことができたように私からは見えませんでした。学校の先生や私たちボランティアの力を借りずにも、自分たちだけでしっかり問題を解決していました。今の時代の子どもたち、私たちの世代も「素直な気持ち」を忘れてしまっていると思います。土屋小学校のみんなを見ていて、改めて自分に素直になることの大切さに気づきました。これからも、私のようにボランティアを通して「素直な気持ち」を思い出してくれる人が増えることを願います。

10. 学校ボランティア

総合理化学プログラム 2年 水野 航

学んだこと・・・校務さんの仕事

活動内容・・・校務さんの仕事内容は、外で

も校舎内でも仕事が多く、外の仕事では校内にあるたくさんの木々の手入れ、雑草を抜いたり、また授業(理科や総合、生活など)などで使用されるであろう土作り、卒業式や始業式、最近では運動会で使用した花の世話、また夏ではプール清掃(他の先生や保護者の方々も参加してやりました)などがあります。校舎内の作業では机や椅子などで、使えなくなったものや、まだ使えるが危険なので使わないものを業者さんが運べるように壊すなどです。実際に自分たちが経験したのはこれらの一部で、花の世話(水あげのみ)や机や椅子の解体、伐採した草木の後処理、プール清掃、土作りです。

感想・・・短い時間しか校務さんの手伝いは出来ませんでしたが、それでも仕事の量の多さや大変さが分かりました。さらにもっと関わっていけば技術や知識の広さを見に付けられると思いました。先生方のスキルとはまた違うものですが、校務さんの仕事について一番学べたと思います。

気付いた点・・・今回「学校ボランティア演習Ⅰ」という授業でボランティアをさせてもらい、自分の目的とは多少異なりましたが一番の収穫となったのは校務さんの仕事についてでした。もしかしたら数年後は教師として生活する学校ですが、校務さんの仕事には考えなければ分からない仕事や、気を使わないと気付けないような仕事があり、その量も多く、大変であるのが印象に残りました。

上で述べたように多少目的と異なったというのは、一番の目的は校務さんの仕事ではなく、先生という立場での仕事についてだったからです。しかし、今回ボランティアとして参加させてもらいましたが、特にやることはなく、学べた点は多くはありませんでした。これはボランティアとして自らやることがないのも原因の1つだと思いますが、自分は普段の生活から小学生や中学生との関わりがあります。もちろん学

校とは違うものですが、切り替えやメリハリ、まとめるといったことは学校より厳しくやっています。これに対して逆に学校は「厳しすぎないようにだらけさせすぎないようにまとめている」と感じました。でも、これはこれで難しいのかなと思いましたが、これがあまり学べなかったと感じる大きな要因ではないかと思いました。また、ボランティアの活動内容についてですが、校務なら校務、先生なら先生、両方なら…と分けてやったほうが良いとも思いました。

11. “学校”を支えること

総合理学プログラム 2年 埼玉 瑞帆

私は前期5月から7月までの火曜日12時40分から14時50分の短い時間でしたが、おもに高学年の授業と校務さんの手伝いをさせていただきました。この活動から児童への接し方、学校を支えている校務さんの仕事の重要性を学びました。

初めてのボランティアは4年生の授業の手伝いでした。昼休みから算数の問題が解けない児童にアドバイスをして、5時間目の図工ではポスター作りの手伝いをしましたが、私にとってはとても簡単なことでも彼らには簡単ではなく、一生懸命考え悩み、試行錯誤をして進めているのがとても印象的でした。この中で、先生方や私が答えや手順などをありのまま教える事は簡単なことですが、彼らのために教え過ぎず、手伝い過ぎずの駆け引きの絶妙さがとても難しく感じました。

それから5年生の授業にも参加させて頂き、こちらではまた別の体験をさせてもらいました。理科でカボチャの苗を植え観察する授業でしたが、児童たちは自由奔放で畑を耕すのもまとまりがなく、作業を進めるのは大変でした。しかし、一緒に同じ作業をしながら話をしてい

くとどんどんまとまりができていきました。畑を耕した後は果樹園で木の実をとったりしたのですが、みな好奇心が強く活発でいろいろな質問を教師や私たち大学生にぶつけていました。その質問に答えるのはとても大変でしたが、こういうことからいろいろなことに興味をもち、それが勉強へつながっていくのだろうと思いました。

6年生の授業には二度参加し、一度目は算数と国語の授業で、やはり4年生の時と同じく教え方が難しかったです。二度目は家庭科の授業でエプロンづくりを手伝いました。家庭科では一人ひとりの進み方が違う為、次から次へといろいろな子から声が掛けられて忙しかったです。ただ、エプロンをつくるという作業でも最初から最後まで助けるのではなく、自力でやろうとするやる気を出させるのは大変でした。

また、学校を支えている校務さんの手伝いはどれも印象的でした。児童たちに危険が及ばないように日々気をつけなければいけないことをこのボランティアで初めて知りました。今まで児童としての立場でいると当たり前のように整備された校庭でしたが、手伝いをする中で、そのためにとても時間と労力を使っていることを身をもって実感しました。たとえ他者の目にその働きが見えなくともそれを怠るとなにかしら危険があり、気をつけないといけないこと、また、その作業がとても大変であることもわかりました。校務さんがいなければ児童たちも先生方も快適に過ごせないでしょう。陰で学校を支えている校務さんの仕事を少しでも体験できたことはとても勉強になりました。

この活動から、児童たちへの接し方と校務さんの仕事の重要性を学びました。これはとても基本的なことだと思います。当たり前のことですが、当たり前だからといって忘れてはいけないとても重要なことだと私は思います。これが崩れることは学校生活、教育の崩壊であると言っても過言ではないのではないのでしょうか。